

# 第1章 被災にどう向き合ったか



震災後の大槌湾

## 3.11—あの日、その後、私が経験したこと

早稲田大学社会科学部研究科博士後期課程  
佐藤 由紀

「成田空港が閉鎖されたため、しばらく上空で待機します。」アナウンスの後、機内は不安な空気に包まれた。隣の乗客と顔を見合わせ情報を待ったが、それ以上は何もなかった。ホノルルからの出張の帰り道、着陸15分前の出来事だった。

しばらく、という時間の感覚は本当に曖昧

だ。どれだけの時間、旋回していたのだろう。突然、「羽田空港も閉鎖されており、もう、燃料もありません。横田基地へ緊急着陸致します。」というアナウンスがあり、続いて「先ほど発生した地震の影響で、東京が機能していないとの情報が入っております。」という、曇った声が聞こえてきた。

ついに関東直下型が起きたのかもしれない・・・私は、ひとり留守番をしている、息子のことを思った。まだ学校にいる時間だろうけれど・・・無事なのだろうか？横田に着陸したらすぐに連絡しよう、そこから中央線

か何かで都心まで帰れるはずだ。  
着陸後、学校へも自宅へも何度電話をかけてもつながらない。いつまでたっても降機が開始される気配がないことに不安も頂点に達し、側を通った客室乗務員にいつ降りられるのかと尋ねた。すると、「お客様、ここは合衆国の土地ですので、ここで降機は出来ません。」というそっけない言葉が返ってきただけであった。「は？なんでよ？だって、基地は CIQ (Customs 税関、Immigration 出入国管理、Quarantine 検疫)のシステム持ってるでしょ？対応出来るじゃない。」冷静さを失っていた私は、我が国の入国審査は国土の最初の上陸地で行われなければならないという大原則をすっかり忘れ、なんて融通の利かない話だ、とひとり憤慨し、しつこく食い下がろうとした。国境管理と安全保障のシンポに出席した帰り道に自ら実地訓練に出されるとはねーイライラしていたその時、給油の後、我々の便は関西空港へ向かうことが機内アナウンスで流れた。窓の外に目を向けると、ジャンボ機がどんどん降りてくる。最終的に、横田基地には20機近いジャンボ機が給油待ちをする風景が出来上がっていた。

給油から関空へ出発するまでどれぐらいの時間が経過したのか。機内で待たされているその間、情報は全く入ってこなかった。東京が機能しなくなるなんてことあるのか？それが現実であるとすれば、やはり直下型地震が襲ったのか・・・関空に到着した時には、夜10時を回ろうとしていた。すぐに息子へ電話をして状況を確認しよう、ただそのことばか

り考え、私は関空で降機が始まると、我先にと出口へ向かった。

どうしたことなのか・・・東京の自宅も、宮城の実家の電話も通じない・・・首都が機能不全になれば、地方にも影響するということはあるのかもしれない。それほど壊滅的な状況なのか・・・息子は生きていたのだろうか？荷物を受け取り空港ロビーへと出た時、中野にいる妹から電話がかかってきた。

「お姉ちゃん、今、どこなの？お父さんと連絡がつかないのよ・・・」悲痛な声だった。

「お父さん？それより、あなたは大丈夫だったの？何度かけても自宅と電話がつながらないのよ・・・賢治がひとりでいるはずなのに・・・」

空港ロビーの大画面テレビの前を横切ろうとして、私は息をのんだ。燃え盛る石油プラントの様子が映し出されている。え？気仙沼って、LIVE って文字が出てる・・・暗くてよく見えないけど、周辺に建物が見当たらないようだよ、なに、この石油プラントの爆発ってそんなにひどかったのかしら・・・東京のニュースはやらないのかな。

「宮城県もひどい被害状況だって・・・お姉ちゃん、お父さんと電話がつながらないの。」

中野の妹から電話があった一時間後、息子と連絡がとれ、さらにその一時間後、父から「家族は全員無事、家も被害なし。」というメールが来て、私はホッと胸をなでおろした。しかしその後、四月半ばまで繰り返し余震が発生し、津波警報が出され、父はそのたびに痴呆の祖母を連れ、避難していた。このとき

間違いなく、父は懸命に生きようとしていた。心配で出張先のソルトレイクから電話をしたときも、父は元気だった。

それなのに。そこから二週間足らずのうちに、父は自ら生きることを放棄してしまった。二番目の妹から「お父さんの様子がおかしいの。」と相談を受けてから十日も経つか経たないか、のことだった。「お姉ちゃん・・・お父さんが家で・・・救急搬送、出来ませんって・・・」二番目の妹の途切れ途切れの言葉を電話越しに聞いたあの日から、私の時は止まっている。

「お父さんはもうだめだ。」旅立つ三日前から、父はその言葉しか言わなくなっていた。

自分は家族も家も無事だった。生活に困ることもない。しかし、自宅から徒歩五分の最寄駅前に自衛隊が駐屯し、川向こう、橋を一つ渡っただけで、廃屋と化した建物と、小さな瓦礫の山が庚申塚のようにいくつも並ぶ風景がそこにある。まぎれもなく、ここは被災地なのだ。「被災地」の映像の中に自分が居を構える場所がある。にこやかに繰り返される「頑張れ」という言葉とともに映し出される「被災地」の様子。祖母が老人福祉施設へ行っている日中、自宅にひとり残された父は、つけっぱなしのテレビから流れてくる「被災地」の映像と現実の生活のはざままで蝕まれ、次第に精神のバランスを崩していった。

「頑張ってください～」とキレイな恰好をした人から楚々として言われると、何か突き放された感じを受けなくもない。そもそも、「頑張れ」という言葉は、発している側に当事者

性がないから言える言葉だ。もうこれ以上頑張れない、というぐらい頑張っているのだから、もう、頑張れとは言わないでほしい。それが、被災地出身者である私の願いである。

## 教育の「実り」が 北東北で教えてくれるもの

弘前大学人文学部教授  
早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員  
柑本 英雄

八戸南高校からの要請で生徒の皆さんにお話に行くために、その道々、鮫漁港・八戸港周辺を歩いた。多くの本学学生の出身地である、この太平洋側青森の参上に目を覆った。未だに身内の見つからない方々や、近親者を亡くされた方々の悲しみが癒えないこの時期に、自分が、震災を語る資格があるのか、そのことを深く問うことからしか、このエッセイを書き始めることができなかった。敬愛する社会学者の新原道信さんの言葉<sup>(1)</sup>に押され、それでも、なおかつ、思いを書き連ねることからしか始められないことを悟り、記録のつもりでここに書くことをお許しいただきたい。

弘前大学には、岩手・宮城・福島にも多くの卒業生が住んでいる。あの揺れを感じた直後から、ゼミ学生・OBOGの安否確認を始めた。次々と、彼らから報告が寄せられた。ただ、被災地の真ん中、数名、連絡のつかないものがいた。

仙台市若葉区ではご遺体が200体、300体

とあがっている、その報道が一番はやかったように記憶する。津波の映像に、山本は大丈夫か・・・と教え子の顔が脳裏をよぎった。彼は、若林区の仙台市立南小泉中学校に昨年就職が決まったばかりだった。13日夜にやっと入った山本からの返信メール「先生、自分の勤務校に続々と近隣住民の方々が避難されてきています」、彼の無事に全身の力が抜けた。同時に、学生時代からボランティアにいそしみ、自分の身を削ってでもひとの気持ちに添うことを厭わない彼のこのあとの健康が気にかかった。「しっかりと食事をとってくれ、しっかりとアパートに戻って身体を休めてくれ」としか、伝えることができなかった。

盛岡には、市消防局のレスキューに所属する下田がいる。この震災で救出にあたり、何かに巻き込まれていないことを祈ることしか自分にはできなかった。「なんとか、自分は無事です・・・」と連絡をくれた彼がこの数ヶ月、「目の当たりにする現実」に彼が耐え抜いてくれることを願うしかなかった。

宮城県庁の川崎は出張先の石巻で、関係者30人を乗せた大型バスで移動中に被災した。津波が来ると判断し、川にかかった橋を増水前にバスが渡りきることができたという。バスで寒さをしのぎながら、13日の昼過ぎにようやく仙台市内に戻ることができた。

この東北地域に住む卒業生、そして、家族の無事がだんだんとわかりはじめた。

そして、何より心を痛めたのは、小山幸司・紀子夫婦とその幼子たちのことだった。二人

は、私のゼミで出会い、3才になる弘華と生後2ヶ月半の由華と郡山で暮らしていた。二人の子供を寝かしつけようとした矢先、揺れを感じ、彼女は子供たちに覆い被さるように守ったという。「思考を止めるな」常々、伝えてきたことを実践してくれた。この揺れでは、原発が大変なことになると考えた彼女は、彼とすぐ相談し、子供の身支度を調べ、二度とここに戻れないことを覚悟し、13日の夕方、家族4人、青森の彼女の実家に向けて車を走らせた。山形・秋田から日本海沿いを抜けるルートを選び、ガソリンが持つところまで走り抜けようと思ったという。ガソリンが切れることを考え、祖父が青森から逆ルートでガソリンを入れたタンクを持って、落ち合うことまで打ち合わせをしていた。かろうじて、たまたま秋田で給油することができ、14日夕方には、新青森駅近くの実家にたどり着くことができた。

翌日、夫である小山は、帰路の燃料は手に入れることなどかなうはずもなく、ましてや、公共交通の手段は遮断されたまま、郡山の職場に戻ることができなかった。家族ともども避難した支社の社員たちに対して、本社からは「敵前逃亡」なる、信じられないような言葉が届いた。

彼女は、自分がしたことに悩み、会社で夫を追い込んでしまったことをわたしに打ち明けてくれた。

「よくぞ、弘華と由華を守ってくれた。君のしたことは何一つ間違っていない、正しいんだ」

9年前、「国際協力なんて百年早い。その前に、家庭内協力をしろ!」と、親に言われたと笑っていた下田がオレンジのユニフォームも誇らしく、鍛え上げられた肉体を危険にさらしている。教職浪人をわたしに隠しながら必死に勉強を続け、合格をうれしそうに伝えてくれた山本が、自分の教室で震える身体を休めるひとびとのお世話をしている。うれしそうに、書き上げた卒論を掲げていた川崎が自らの足で県庁までたどり着き、執務を滞りなく進めている。この弘前大学人文学部国際協力研究室を巣立っていった学生たちが、自らの意志で、徹底的に考えて行動をとって来ていた。

そんな折、高橋源一郎さんの記事が目にとまった。わたしはその記事を小山夫婦に送った。

東北を地震と津波が襲った3月11日から何日かたって、東京から新幹線に乗った人がいた。車両は、子ども、というか赤ん坊を連れた母親ばかりで、通路には、何台もの乳母車（バギー）が置かれていた。その人は、最初、母親と子どもの団体が乗りこんだものと考えた。だが、通過する駅ごとに、母親と子どもが消えてゆくを見て、偶然、同じ列車に乗り合わせただけだとわかった。母親たちは、手短かに情報を交換し、「義援金を送ったわ」といい、それから、目的地に着くと、「ごきげんよう」と残る母親にいつ降り立った。破壊された原発から流出した放射性物質による汚染を恐れて「疎開」する母親たちだ。その人は、母親たちが、情報を鵜呑（うの）みにすることなく、自分の「身の丈」に従って取捨選択し、行動している様子を、好

ましい、と感じた。そうわたしに話してくれたのは、66年前の3月10日、東京大空襲で10万人が亡くなった時、炎の中を逃げまどい、かろうじて生き残った人だった。

（「震災とことば一身の丈越えぬ発言に希望」朝日新聞、2011年4月28日）

災厄への備えとは何か、この辺境の国立大学が北東北地域に送り出す人材こそが、何よりの備えとして、人々を守る礎となってくれている。この記事の母親たちと同様に、教え子たちは自ら思考することを放棄せず、この震災後の日々を過ごしてくれている。迷いとともに、学生とここに在る。未だ、そこから抜け出せない自分に、わたしの手元を離れてからこそが“教え子の真骨頂”であることを目の当たりにさせられた思いがした。

最後に、茨城で実家全壊に遭われた北川のご家族をはじめ、石巻で被災した当時現役ゼミ生宍尾のご家族へのお見舞いを述べさせていただき、また、震災の日から時計が止まったままの方々の思いに何とか添うことを模索しつつ、このエッセイの筆をおきたい。教育の現場での役割とは何か、教え子たちから受け取ったことをこれからも思考を止めず、考え続けていくことにしたい<sup>(2)</sup>。

(1) 新原道信「旅をして、出会い、ともに考える―「見知らぬ明日」へ向かって」教育×ChuoOnline

2011年8月22日 <http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/opinion/20110822.htm>

(2) 文中のOBOG、学生の人名は仮名にさせていただきました。

## 東日本大震災について

早稲田大学国際教養学部教授 平山廉

まず初めに、3月の大震災で亡くなられた約2万名の方々のご冥福をお祈りすると共に、ご遺族や関係者にお悔やみを申し上げる次第である。

3月11日は、9日から来日していたロシア人古生物学者のダニロフ博士（サンクトペテルブルク大学動物学研究所主席研究員）および2名の大学院生と共に早稲田キャンパス11号館7階の部屋にいて、化石資料を机の上に並べて議論の真っ最中であった。最初に振動に気付いたのはダニロフさんで、「これは地震なのか？」と尋ねてきた。答えは自明であったので、机の間に身を伏せているしかなかった。11号館は2009年3月に完成したばかりで免震構造もしっかりしていたが、建物がきしむ音とブランコに乗せられているかのような揺れの大きさ、時間の長さに不安が増幅するばかりであった。

6分ほどして振動がようやく収まり、学生が携帯でニュースをチェックして宮城県沖を震源とする巨大地震であること、また太平洋岸一帯に大津波警報が出されていることが判明した。20分ほどすると茨城県沖を震源とする余震が発生、こちらの揺れも強く数分ほど続いた。室内のロッカー内や机の上に並べてあった資料や顕微鏡などの機材は倒れることもなかったが、14階にある研究室の様子が心配になり、階段を駆け上がった。室内には書棚やロッカーが所狭しと並んでいるのだが、

本が一部崩落しただけで、目立った被害はなかった。その後、11号館を出て、教育学部の知人の先生の研究室を訪問、学生たちはここに泊めていただくことになった。学生がパソコンの画面上で東北地方の太平洋沿岸を襲う大津波の映像を見せてくれて、今回の地震の恐ろしさの一端を知ることになった。

夕方には、家族や親戚全員の無事が確認できたが、ダニロフさんを中央線駅前のホテルまで送る必要があった。夕食後、高田馬場駅までバスに乗ったが、車道は大渋滞で歩く方が速い。馬場からは徒歩2時間で11時頃に阿佐ヶ谷駅前のホテルに到着し、翌日の再会を約束して別れた。私は、ここからさらに1時間歩いて自宅に戻ることができた。家内は、都内の高校にいた娘を車で迎えに出かけていたが、大渋滞に巻き込まれてしまい、2人が帰宅したのは明け方の4時過ぎであった。

自宅近くに化石や図書を保管した私設研究所があるのだが、こちらはやや古い建物の8階にあったせいもあり、本棚が幾つか倒れていた。部屋中に書籍や資料が散乱して後片付けに数日かかるほどであった。古いパソコンが棚から転がり落ちて粗大ゴミになってしまったのはむしろ良かったのかも知れない。

ダニロフさんの研究意欲は震災にも動じることはなく、翌日も午後から大学に来て共同研究をすることになった。来日早々に起きた災難を私が詫びると、「地震は初めての経験だけど、非常時における日本人の冷静さ、秩序ある行動にあらためて感服した。ロシアだったら店が略奪されるなどして大騒ぎになって

いるはず。ロシアはテロの危険もあり、日本のほうがずっと安全だよ。」と言ってくれたことに妙に納得してしまった。ロシアにいる奥さんはメールで早期の帰国を勧めたそうだが、ダニロフさんは予定通り 16 日の帰国まで研究を続けてくれた。彼の行動は、私にとっても非常に勇気づけられるものであった。

その後、3 月から 4 月にかけて学生らと共に島根県や九州に出かけて古生物学的調査をおこなった。4 月の授業がなくなったことは、私にとってはむしろ幸いであった。さらに 4 月終わりから 5 月初めにかけて、被災地でもある岩手県久慈市をお見舞いがてら調査に訪れた。自家用車で東北自動車道を走ったのだが、福島県に入ると路面の凹凸が大きくなり、車窓から見える民家の屋根瓦も青いビニールシートで覆われたものが目立つようになった。

久慈市は琥珀（こはく）が多産することで古くから有名な場所である。久慈の琥珀は、恐竜の時代（中生代白亜紀：約 8500 万年前）の地層にふくまれているのだが、2005 年頃からカメ類やワニ、さらに恐竜などの化石が琥珀と共に見つかるようになっていた。久慈市には久慈琥珀博物館があり、琥珀をメインにしたユニークな施設となっている。久慈の調査では、佐々木和久さんなど久慈琥珀博物館の関係者にお世話になってきた。7 月には、博物館学芸員の滝沢利夫さんが見つけた化石が翼竜（よくりゅう：絶滅した飛行性の爬虫類）の翼の一部であることを久慈市で発表した。報道でご存じの方もいらっしゃるかも知れない。滝沢さんによると、7 月の翼竜発

表の後に博物館入場者が急増しているそうで、なんとも嬉しい限りである。

佐々木さんや博物館の無事は震災直後に確認できたが、12 日夜は依然として震度 4 の余震が数分おきに発生する「非常事態」であると佐々木さんがメールで報せてきた。4 月末の訪問時は余震もなかったが、佐々木さんのご案内で隣接した野田村（のだむら）の海岸地域に出ると、そこは津波ですっかり破壊されていた。建物が壊されているだけでなく、防風林の松林がすべて根こそぎ引っこ抜かれて横倒しになっている。破壊された建物のかかり多くが片付けられて瓦礫（がれき）の山となっていたが、新しく造られたような建物は見当たらない。被災地の壊滅的な現状を目の当たりにしては声も出なかった。

5 月 2 日には久慈市内での調査を終え、三陸海岸の国道を通過して帰ることにした。その途上で岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、陸前高田市、さらに大船渡市まで約 150 キロを走ったが、どの街も原爆投下直後の広島のような有様であった。かろうじて残存した建物はいずれも鉄筋コンクリート製であるが、3 階ないし 5 階付近まで津波が到達した痕跡が認められた。驚くべきことに海にあった巨大な堤防までもが破壊されて見えなくなっていた。

また地盤沈下も海岸付近で著しかったようである。陸前高田市の「海と貝のミュージアム」は建物はほぼ原型を残していたのだが、そのすぐ向こうが波打ち際になっていた。この博物館はもともと海岸から 200 メートルほ

ど内陸に位置していた。つまり、津波によって建物が流されただけでなく居住地もろとも水没・消滅してしまった地域も多かったのである。火事が起きて焼け野原になった場所もあった。ペシャンコにつぶれて腰の高さほどになったバスや消防車も見かけた。こんな光景が青森県から福島県、茨城県までの太平洋岸に約 600 キロにわたって延々と続いているのだから、まさに言語を絶する状況である。福島県の原子力発電所の事故はさらに悲惨で後遺症も深く大きい。被災地の復興や復旧が軽々しく出来るものでないことは、現実を直視すれば理解できる。

単純に運動エネルギーの量だけで比較するならば、東日本大震災は広島で炸裂した原子爆弾の約 20 万倍にも達したと推定されている。東北沖の海底で原爆が一度に 20 万個も爆発したことになるが、被災地の惨状を見るとそれも納得できる。

人間が営々として一生をかけて築いたものを一瞬にして瓦礫に変えてしまう力が地下には秘められているのだ。東北地方で実施されたボーリングの地質調査により、今回のような規模の巨大地震とそれに伴う大津波はおおよそ 1000 年に一度の割合で起きてきたことが判明してきた。不幸にもそれが今年 3 月に起きてしまったわけである。

さらに日本国民の不安をかきたてているのが、近い将来、東海から南海方面において巨大地震と大津波が発生するのではないかという専門家の予測である。これがいつ襲来するのか正確な時期を知ることは現段階ではでき

ないが、たとえ予測できたところで人命救助を最優先した対策に力を入れるしかないのではないだろうか？今回のような規模の津波を完全に防ぐような堤防の建設は技術的にも経済的にも現実的ではないと思われる。人々がいち早く津波から逃れるための身近な避難場所（高台や鉄筋コンクリート製のビルなど）を確保することが賢明であろう。

我が国のエネルギー政策にも根本的な見直しが迫られている。日本では、原子力発電が経済的で環境にも優しいエネルギーとして喧伝されてきたが、実際には「ハイリスク、ハイリターン」であることを露呈してしまった。関東地方では震災以来、原発抜き電力需要を節電で賄ってきたが、やればできるじゃないかというのが私の実感である。そもそも日本のような自然災害に見舞われやすく、人口の稠密な場所に原発を建設する必然性があったのだろうか？

日本に限らず、長期にわたって大災害に絶対見舞われない場所というのは地球上には存在しない。原発は「想定内」の平和的な条件であれば制御できるが、「想定外」の災害やトラブルにはきわめて脆弱なシステムである。原発で生じた放射性廃棄物を数万年 (!) にわたって安全に保管しなければならないというリスクを考えても、原子力の使用は極力避けるのが得策であろう。

日本は、これまでも多くの災害に見舞われて甚大な被害を被ってきた。自然災害では、関東大震災など地震や津波による被害が最も深刻なことは論を待たない。しかし、自然災



害よりはるかに恐ろしいのが、戦争やテロによる犠牲と破壊である。すでに指摘したように、東日本大震災で発生したエネルギーのわずか20万分の1の威力のたった1個の原爆が広島を瞬時に壊滅させ、約14万人が即死した。第二次大戦では、全世界で約7000万人が犠牲になったと推計されている。

私が強調したいのは、国家間や民族間、異文化間の紛争が自然災害よりはるかに深刻な被害や根深い遺恨をもたらすリスクである。これを未然に防ぐには、異民族や異文化を排除、否定するのではなく、互いに存在を認め合う寛容の精神が必要である。国際的なテロ組織以外にも、日本の伝統的な捕鯨を力づくで排除しようとするグループがあるなど、現実には予断を許さないものがある。自然が生み出した生物の多様性に比べれば、人間の文化や肉体の相違など些末なものにすぎない。人間は今こそ自然の持つ多様性に学ばなければならぬのではないだろうか？

### 学校教育にもパラダイムの転換を求めた 3.11

早稲田大学大学院社会科学研究所博士課程  
滝沢 雅彦

#### 3.11—その時、東京の中学校では

平成23年3月11日、金曜日、午後2時46分、その時、私が勤務する中学校では、6時間目の授業中であった。第3学年は18日に迫った卒業式に向けて、学校の体育館で式の練

習中、第1学年と第2学年は各教室における通常の授業を行っていた。

校長である私は、市の教育センターで行われていた市内38校の中学校長が一堂に会して月例で行われる会議に出席していたが、地震が発生した直後、全員が一斉に机下避難し、携帯電話でそれぞれの学校に連絡を取ろうとしていた。しかし、誰も学校と電話が繋がらない。一人の校長が携帯電話からインターネットにアクセスし地震の速報を伝えた。私は直ぐに、学校の副校長へ「東北地方で大地震が発生。直ちに帰校し指示する。それまで全校生徒を教室で机下避難させ、教員を各教室に配備させ待機せよ。」というメールを送信し、私の学校と同じ方向に向かう別の校長の車に便乗し学校へ急いだ。

私が校長を務める八王子市立松木中学校は、平成6年開校という比較的新しい学校であり、校舎は耐震構造になっている。そのため、いたずらに外へ出て避難するより、校舎内で待機させた方がより安全であると判断した。学校に戻った私は、副校長以下の幹部教職員を集め、550名の生徒の全員の無事を確認したうえで、テレビのニュースとインターネットで余震に対する情報を集めた後、校内放送を通じて、生徒に机下から出て良いことと、落ち着いて教室で待機することを指示し、各担任にも生徒保護と教室待機を命じた。

この時、近隣の高層住宅に居住する15名の地域住民が、不安のあまり学校に避難して来られた。そこでその方々を、畳敷きの武道場に案内し、状況が落ち着くまで過ごしていた

だくことにした。

## マニュアルが想定していなかった

### 事態への対応

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災以降、地方自治体ではそれぞれ防災マニュアルを改訂または新たに作成して大地震等の災害に備えていた。八王子市も例外ではなかった。しかし、この度の東日本大震災は市の防災マニュアルの想定を遥かに超えていた。マニュアルによるのではなく、全てに校長の自らの判断が求められた。

16時、大きな余震の可能性が低くなったと判断し、生徒を下校、帰宅させることを決定した。しかし、地域一帯の停電のため、信号機が作動していない。そこで、生徒を教室から校外へ誘導する担当教員グループと、生徒が利用する通学路の交差点の要所要所に立って交通整理をしながら生徒の安全な下校を助ける担当教員グループという2つのグループに分け、それぞれ配置に付けた。

電話が通じないため保護者との連絡が取れない。帰宅困難者となっている保護者も多数いると思われた。また、小学生、幼稚園児、保育園児の弟や妹がいる生徒も数十名いる。そこで、弟妹がいる生徒は、それぞれの弟妹が待機しているはずの小学校、幼稚園、保育園に立ち寄り、弟妹を連れて帰宅すること、家の鍵を持たず保護者が不在のために家の中に入れなかった生徒は直ぐに中学校に戻ることに、という指示を与えたうえで、生徒の居住地域別に集団下校させた。

学校から最も遠い所に住んでいる生徒が一旦自宅に着いたとして自宅に入れず学校に戻って来るとしても、18時を過ぎることはない。18時までは全教職員を職員室で待機させ対応に備えた。しかし、幸いなことに保護者から1件の問い合わせがあったのみで、しかもそれも直ぐに問題解決に至ったため、生徒全員が帰宅出来たと考えられた。

武道場で落ち着くのを待っていた地域の方々も三々五々お帰りになった。

あとは教職員の安全確保と無事な帰宅である。八王子市は東京都内で唯一、車両通勤が認められている地域である。本校の教職員も約3分の2が車両通勤であったため、電車不通のために帰宅困難になっていた教職員を分乗させ、自宅または付近まで送り届けた後、全員帰宅させた。

私は唯一学校に残り、その後の不測の事態に備えた。しかし、これも幸いなことにその夜1件の問い合わせもないまま、翌日曜日の朝を迎えたのであった。

## 学校教育に求められるパラダイムの転換

学校教育に求められる教育課題は多岐にわたる。ところが最近では、学力向上と、いじめ・不登校対策を中心とした健全育成といった、教育活動の成果をいかに上げるかということに重きが置かれてきた。しかし、真の教育課題とは、まず生徒が安心・安全に学校生活を送ることができること、その大前提として地域の教育センター・防災センターとしての機能を学校が果たすこと、そして、そのう

えて地域の子どもたちをいかに守り、育てていくかということにあるのではないだろうか。

地震と大津波は、被災地の人々の生活を一瞬にして流し去ってしまった。被災した小中学生も多い。学校の教育活動が再開されるために多くの時間がかかった。未だ再開の目途が立たない学校もある。この度の大震災は、私たち教育の現場に携わる者全てに対して、学校教育の基本へ還れというパラダイムの転換を求めている。

## 忘れてはならないこと

早稲田大学大学院社会科学部博士課程  
小林 良枝

「東日本大震災」から4カ月が過ぎた。記憶と呼ぶには未だ心身に定着していないが、3月11日以降、何を感じ、何を考え行動したのかについて、記してみたい。一人一人が歴史の証言者として自身の行動を記録することは、同時代を生きている人間にとって必要な作業であろうから。

その日、藤沢の駅前にある喫茶店で、友人とランチの後のお茶を飲んでいて。紅茶とケーキを食べ楽しい時間を過ごしている時に14時46分を迎えた。大きな地震の揺れが、長く続いた。店の客たちも、始めのうちは様子をうかがい席に着いていたが、次第に慌てだし、一人が外へ出たのをきっかけに、次々外へ飛び出した。私も頭上にディスプレイさ

れていた色とりどりのガラスの瓶が気になって、友人共々恐る恐る外へ出ることにした。目の前には歩道橋があり、見ると上の方からポロポロと錆のようなものが落ちてきた。揺れはまだ続いていた。娘に電話をかけたが通じない。かろうじてメールが届き一安心し、店の中へ戻った。それから、2〜3時間ほどして駅へ行くと、電車は不通で、駅の改札にある大画面のテレビには信じられないような光景が映し出されていた。大勢の人が画面を見つめていたが、皆声を失っていた。東北地方を襲った地震と大津波。とても現実のものとは思えなかった。

電車が動かないので、私は鶴沼にある友人の家に泊まることになったが、交番で警察官が、大津波警報が発令されているので、海から200メートル圏内に家がある人は帰宅を見合わせるように呼びかけていた。彼女の家は海岸から150メートルのところにある。しかし、夜になってきたので、二人で家に向かう事にした。その後家族とは全く連絡がとれなくなり、再び通じたのは、深夜1時のことだった。

大津波警報に怯えながら一夜を過ごした。単身赴任で九州にいる彼女の夫から何回も連絡があったが、電話の向こうで「これから、ソフトボールの試合だから…」と言っていたと聞いた時、「ソフトボール」ということばがやけに輝かしく、晴々しく響き、当たり前の日常が遠いところにあるような気がした。

それから数日間、スーパーやコンビニからは蝋燭と、懐中電灯とパンとカップ麺、ティ

ッシューパー、そしてペットボトルの水が姿を消した。普段は商品であふれている店の商品棚は空になり、商品の代わりに皆の不安が置かれているようだった。1週間ほどそのような事態が続いたであろうか。(すでに記憶が曖昧になっている) 計画停電が始まった。横浜にある私の家は計画区域には入っていたのだが、1回も停電は行われなかった。しかし、同じ横浜でも、実家では停電が実行され、しかもオール電化であったため両親は不自由な時間を過ごしたと話していた。

落ち着くまで、半月はかかったであろうか。最初の1週間はテレビに釘付けであった。繰り返しの映像と、確信のつかめないコメントと、はっきりしない記者会見の様子が放映され続けた。福島第一原発事故の收拾のつかない悲惨な状況は、日に日に深刻度を増し、清々しいはずの朝の空気も重いもの感じられ、いつでもどこでも何かか頭と体に覆いかぶさっているような息苦しさを感じて過ごしていた。このような感覚は、個人的なものでありながら、多くの人と共有していたように思う。

あれから4カ月が過ぎた。国策としてのエネルギー政策は脱原発へシフトしていきそうな方向であるが、ドイツやイタリアのようにすぐさま転換されることはなさそうである。そして、原発事故の報道は日に日に少なくなり、被災者についての報道もニュースの一面から消えようとしている。

大震災と原発事故という出来事が内包している物語性は、個々の被災者の物語から東北復興再生の物語へ移り、原発事故回復の進展

状況は落ち着いてきたのだろうか、情報は少なくなり、それに変わって放射能についての情報が、日常の中で語られるようになった。メディアが伝ええないものについては、それが存在しないわけではないが、社会はそれを忘れていく。そして、いつしか安心する。それがメディアの特徴であるが、私たちは今もお多くの被災者が不自由な生活を送り、不安な日々を過ごしていることを決して忘れてはならないし、震災からの復興と原発事故後の社会のあり方を構築していかなければならないのである。

とはいえ、あの日からの事は被災地からの距離と比例するかのように遠くなりつつある。メディアの図式から見れば、出来事の物語性は、「我々」と「彼ら」という出来事や状況に対する「帰属意識とそれを通しての自己認識」が加わり単純化されていくのが常套である。

しかし、あの日経験した地震の揺れや、帰宅難民状態、物資の不足、計画停電、放射能汚染等、程度の差はあれ首都圏の私たちもまた東北の人々同様、被災者だったのだ。私たちは被災地や被災者との関係を「我々」と「彼ら」と切断して考えるてはならない。福島で起っていることは、日本全体の問題であるのだから。

## 「フクシマ」から「福島」へ

早稲田大学オープン教育センター非常勤講師  
佐川 佳之

### 地震と福島

3月11日。早稲田大学の研究室で勤務中に、私は地震に遭遇した。その揺れはこれまでに経験したことのないものであった。研究室が9階という比較的高所にあるため、まるで船に揺られているような感覚であった。建物のコンクリートの柱が軋む音や、ワイヤーで吊るされたエレベーターが揺れて側面の壁にガンガン打ち付けられる音が廊下に響いていた。その音を思い出すだけで、今でもぞっとする。

そのときは「東海地震がついにきたのか」と思った。しかしまもなく揺れが収まり、階段を下りながら、携帯電話でニュースを確認すると、東北地方が震源地だと判明した。しかも私の出身地の福島県もまさにその震源域の一つであり、海沿いに津波警報がすでに出ていた。テレビで津波による被害の様子が中継され、これは尋常でない災害であることはすぐわかった。その一方で、現実の出来事として受け止められず、大丈夫だろうという楽観的な気持ちもあった。私にとって、福島とは安全な場所であり、福島と災害は結びつくものではなかったからだ。だが、原発事故の状況を知るにつれて、私の期待はもろくも崩れ去った。

### 「安全性」の民話

私の出身地は福島県南部に位置する東白川

郡矢祭町である。生まれてから高校を卒業するまで、そこで暮らした。阿武隈山系と八溝山系に囲まれた、人口6,000人ほどの非常にのどかな農村である。近年では、合併や住基ネット接続を拒否する町としてメディアの注目を集めたこともあった。

福島に暮らしていた頃、「福島は昔、磐城国や岩代国（戊辰戦争期の国名）と言われ、「いわ」（磐・岩）と地名につくくらいだから、地盤が硬く地震に強い」といった内容の語りを、家族や近所の住民から聞かされていた。こうした地名から地震に対する強さを強調する語りは、我が家や近所で勝手に語られていたものだと思っていた。しかし震災後、福島市に住む研究者の被災地報告を聞く機会があり、その研究者は県民の災害に対する意識を示す際に、この地名に関する同様のエピソードを紹介していた。そこで初めて、それが町内のローカルな語りではなく、県内で広く共有されていたものだと知った。

冷静に考えれば、地名と安全性の相関に明確な科学的な根拠があるとは言えないだろう。ただし、この安全性については必ずしも無根拠というわけではなく、地震の統計を見れば、確かにこの地域は比較的に地震が少なく、揺れも小さいと予測されていた（文部科学省・地震調査研究推進本部事務局2009『日本の地震活動』pp.123-126）。1990年代に福島県と栃木県で大々的に宣伝されていた白河・那須地域への首都機能移転計画は、首都圏における東海地震を念頭に入れて、地震に対する「安全性」を売りにしていたように記憶する。

原発もこうした「安全性」の中で、語られていたのを思い出す。例えば、中学生の頃、ある教師が福島に原発があるのは福島に地震がないからだと言っていた。相双地区（原発のある地域）では、原発を誘致したことで補助金がたくさん出るために、学校の機材やプリントの紙の質が上等だなどと、羨望の対象として噂されることさえあった。また福島県いわき市出身の社会学者で、福島の原発周辺地域のフィールドワークを行った開沼博は、「原発事故の確率より、外を歩いていて交通事故にあう確立のほうが高いから大丈夫」といった原発周辺に暮らす住民の語りを紹介している（朝日新聞 2011.3.29 朝刊）が、原発から 80km ほど離れた矢祭町でも、これと同様の語りがなされていたのを覚えている。このような民俗の世界の中で生活していた私自身、中学生の頃、日本原子力文化振興財団主催の原子力に関する作文コンクールで、原発の安全性と地球環境に対する利点を書き、入選したことがある。

勿論、ここに暮らす人々が原発の危険性に無頓着であったわけではないし、様々な形で反対運動も行われていた。とはいえ、原発の存在がリアルな問題として広く議論されることはそれほどなかったように思う（当然、この意識形成には様々なアクターによる政治的な思惑が働いていた）。この地域における災害や原発に対する「安全性」への素朴な信頼は、こうした日常の中の民話として広く語り継がれていく中で慣習化されていったと思われる。私は知識を学んでいく中で、「安全性」に対す

る疑問をもつようになっていったつもりでいたが、それほど深く考えることもなかった。慣習として身につけてしまった意識は、リスクをリアルなものとして捉え、それを他者に伝えるのを妨げていたのかもしれない。

### 「福島」から「フクシマ」へ

周知の通り、原発事故による被害は、国内外で震災後まもなく大きく報じられた。1号機と3号機の爆発の後、次第に増えていく放射線量は、福島県やその周辺の地域の人々を恐れさせた。爆発した日の翌日、矢祭町の実家に電話をすると、母親は「災害がないと言われていたのにね」ともらし、力のない様子であった。「安全性」はただのお話に過ぎなかったのだ。実家に暮らす妹は、爆発後まもなく、東京に避難してきた。私は矢祭町に人が住めなくなるのではないかと危惧したが、原発からの距離、爆発直後の風向きや天候、山に囲まれた地形などが作用したためか、県内の他の市町村に比べ低い放射線量（2011年9月30日時点で0.10マイクロシーベルト毎時）で推移している。

4月には、IAEAによる原発事故の評価が、チェルノブイリと同様に「レベル7」とされた。その評価の尺度の妥当性をめぐっては様々な疑問が呈されたが、その意味づけによって、その事故の深刻さや放射能汚染の実態が国境を越えて広く実感されることとなった。こうした中で、福島の原発事故や事故をめぐる様々な出来事が「フクシマ」というカタカナ表記で記述されるのを、新聞などで頻繁に

目にするようになった。この表記からは、福島原発事故が、チェルノブイリやスリーマイルの原発事故、あるいはヒロシマとナガサキの原爆などと同様に、アルファベットで表記されるべき世界規模の事故であることを示す意図が読み取れる。福島は「フクシマ」として原発や放射能という枠の中で語られ始めたのである。そこでは「フクシマ」が支援や復興の対象であるだけでなく、多数の避難者が出たり、様々な形で放射能をめぐる福島への差別が生まれているように、恐怖や不安の対象として表れるようになっていった。

放射能は様々な形で福島のこれまでの日常のあり方を変えている。原発周辺地域ほどではないが、矢祭町の日常も一変した。小中学校や公共施設での放射線量の測定結果は毎日のように公表され、表土を削るなどの除染作業も他の地域と同様にされている。作付けを判断するため田畑の放射線量も調べられ、我が家のりんご畑の土からは200ベクレルほどの放射性物質が検出された。県外と取引をしている地元企業は、取引先から商品に対する放射能検査を求められるケースも少なくないという。また矢祭町の新聞社が発行する「夕刊矢祭」の地元商店の広告欄には、日用雑貨とともに除染用の「高圧洗浄機」、「放射線チェッカー」、セシウムを吸着させるための「フレッシュドライ」(ゼオライト)などの商品が並べられており、それだけ放射能対策が住民生活の身近な課題となっていることがわかる。住民の楽しみであった山菜採りや釣り、あるいは学校のプール使用が放射能汚染の数値の

度合いで左右されるなど、生活のあらゆる営みが放射能への恐怖や不安の中で意識化せざるを得ない状況になっている。

## 日常において「福島」を取り戻す

今夏、矢祭町に帰省した折に、小学校の校庭や畑などのいたる所で、たくさんの向日葵がきれいに咲いているのを目にした。この向日葵は、放射能に汚染された土壌を浄化するために植えられたものらしい。福島原発の事故後、チェルノブイリで行われた向日葵を使った土壌浄化が広く知れ渡ったことで、全国から県内各地に向日葵の種子が届けられたという。こうした向日葵の運動だけでなく、「フクシマ」を支援するための様々な運動やイベントが行われている。例えば「猪苗代湖ズ」というバンドが歌う曲が福島の応援ソングとして地元テレビ局やインターネットの動画サイトで頻繁に流され、また音楽やスポーツのイベントなどが県内各地で開催されている。そうした運動やイベントでは、「がんばろう」や「つながり」などといった前向きな言葉があふれている。私自身、研究者の立場としてはこれらを冷静に捉えるべきであったが、正直、このような「フクシマ」を応援する言葉や一体感に感動さえ覚えた。

ところが、福島滞在中にこの感動は冷めてしまった。それはある住民の言葉を聞いたからである。私が「福島への応援が盛り上がっていますね」と何の考えもなく口にする、その人は県内で行われたあるイベントを取り上げながら、「頑張れって応援されたって、こ

っちは言われなくたって頑張っているんだ。そんなイベントよりも放射能とか風評被害とかの実態をなんとかしてほしいね」と真顔で応え、原発事故後の仕事の変化を語った。私はこうした苛立ちなど想像すらできず、外側でドラマティックな言葉や雰囲気を楽しんでいただけだった。この語りから、「フクシマ」ではなく、「福島」としての日常を取り戻そうとしている住民の姿の一端を見た気がした。

イベントのような「ハレ」の場を通じて、多くの人々が勇気づけられたであろうし、また「フクシマ」への支援が得られたのは確かである。しかしその反面、外部で語られる抽象的な言葉からは、「ケ」の場における多様で細かな不満や不安、あるいは希望のあり方を読み取することは難しい。原発事故後の福島、あるいは広く日本の社会を構築する上で、放射能の中で不確定な現実を生きざるを得ない住民の複雑な思いや声にも目を向け、そこから社会のあり方を共に考える必要があるだろう。抽象的な思想、哲学、文明論などに依拠した社会構想や運動を進めることは大切だが、原発事故や震災をめぐる微細な日常の語りにも耳を傾け、語り継いでいく地道な作業を忘れてはならないように思う。



遠野市付近

## 被災地で感じてきたこと

早稲田大学社会科学部3年 久山 雄大

2011年3月11日に東日本大震災が起こった。その時私は北海道に旅行中で東京にいた家族や友達のように大きな揺れを感じる事が無く、「未曾有の大震災が起きた」という実感はまるで無かった。しかし、その夜にホテルで見たニュースを通じてショッキングな現実を知ることになった。東京にいる家族や友達のことにも心配だったし、自分自身が帰れるかも不安だった。ニュースを見るたびに死者の数は増えて、この地震がどれだけ大きなものか少しずつ実感も持てるようになっていった。それでもテレビに映る光景がCGなんじゃないか、現実のものではないんじゃないかと現実を信じ切れずにもいた。

東京に戻ってからは震災の話で持ち切りだった。地震の規模が大きかっただけでなく、予想を遥かに超えた津波や福島第一原子力発電所の放射能漏れなど、その話題は尽きることはなかった。地震の話になると「死ぬかと思った」「とうとう東京にも来たか」と言う人が多かったが、自分自身は北海道でほとんど揺れを感じていなかったため、みんなと共通の体験をしていない。大きな揺れに巻き込まれなかったのは幸いだったけれども、なんとなく疎外感と言うか乗り遅れた気がした。そんな時に「被災地に行ってみたい」と初めて思ったのだと思う。

そう思った矢先に鎌倉でこやで避難所に



赴いているメンバーがいるという話を聞いて、大学が急遽休みになった4月の終わりに福島県会津若松市に帯同させてもらった。会津若松市の東山温泉という温泉街は福島県大熊町（福島第一原子力発電所がある地域）の方々の避難所となっていて、そこを訪れることになった。この時が本当に私が震災に直面したと言える時だったと思う。避難所になっているホテルではやはり重い雰囲気を感じた。避難をするということは「ただ難を逃れるというだけではなく、家や仕事を手放して、いつ自分の町に帰れるか分からないという不安と生きなければいけない」ことだということを肌で感じた。避難所で暮らす人の気持ちは東京で暮らす自分には量り知ることのできない心境であるに違いないと思った。

会津若松市に行った後すぐに、てらこやネットワークを通じて津波の被害を受けた岩手県釜石市に行くという話をもらって、こちらにも帯同させていただいた。会津若松市に避難している方々が受けた被害が「目に見えない被害」だとしたら釜石市の被害は間違いなく「目に見える」被害だと感じた。もちろんどちらの方が大きいとか、そういうことは問題ではないと思う。釜石市に入って間もない内陸部では何も感じなかったが、海に近づくにつれてその被害の甚大さを実感することになった。津波によって家は潰れ、車はあり得ない場所まで運ばれていた。目に見える光景も凄まじいけれども、破壊された町から発せられる臭いも凄まじかった。文面では伝わらない、まさに筆舌に尽くし難い光景だった。

この2つの地域へ行った事は紛れもなく、自分にとって「貴重な体験」になった。

こうして「何かしたい」と思い、「自分に何ができるか」を考えた。そうして自分なりに出した答えは「自分の持てるつながりを活かすこと」だった。

まず自分の持てるつながりの1つとして挙げられるのは「てらこや」とのつながりだった。このてらこやというつながりを通じて被災地を支援できるというのは、「何かしたい」と思う身にとって様々なチャンスを与えてくれたと思う。避難所に直接赴いて子どもたちと遊んだり、イベントを開いて一緒に遊んだり、鎌倉に避難所の子どもたちを招待して一緒に合宿をしたり…。こういったことは自分一人ではできるはずがなく、てらこやとてらこやに関わるメンバーとのつながりがあったからこそ成功できた支援だったと思う。現地の方に「瓦礫撤去などの成果を目で確認できる復興支援には人が集まるが、成果を目で確認することのできない子どものケアなどの支援には人が集まりにくい」というお話を聞いたことがある。てらこやとして今までやってきた支援には後者の支援が多い。そういった意味でも意義のある支援が行えたのではないかと感じている。

もう1つ挙げられるつながりとしては「人」とのつながりだと思う。幾度か被災地に赴いて様々な人のお話を聞くことができた。中でも印象深いのは「観光気分でも良いから、ここ（釜石・大槌町）で見たことを持って帰って、周りに広めてくれるだけでいい」という

話だ。この話を聞いた後、地元に戻って様々な友達に写真を見せながら自分の体験を話した。すると夏休みが近づく最近になって何人かの友達から「被災地支援に行きたい」ということで支援について改めて尋ねられた。被災地で現地の人の声を聞いて、地元に戻ってから身近な人に経験を語る。それだけでも支援の輪が広まり、支援の拡大につながると思う。時間が経つほど被災地に対する人の意識は薄まってくる。それはある意味では仕方のないことでもあると思う。被災地と身の回りを結ぶことも、ささやかではあるけれども自分にできる、自分の持てるつながりを活かした支援とっていいのではないかと思う。

こうして自分の考えを述べているが、何よりも言いたいのは「被災地の現状を自分自身で確かめるべきなのではないか」ということ。自分が大して貢献できていないために大したことと言えないが、まだ被災地に赴いたことのない人はぜひ実際に被災地に赴いて、何か感じてくるべき。それがまず1つ、被災地を自分の目で見てきた私が言えることだと思う。

### 震災以後、何ができるのか —祈りの力

早稲田大学社会科学部4年 田中 恵美

#### ローマ法王の言葉

私が震災以降特に気にかけるようになったことは祈りについてである。そのきっかけになったのは、震災後まもなくローマ法王から

日本へよせられたメッセージであった。それは被災地の小学生からの、なぜこのような辛い目にあうのでしょうかという質問に対するローマ法王の回答であったのだが、ローマ法王はつらい思いをしなければいけない理由は分からないが、それでも祈りましようと言ったのである。

私は、正直なところこの言葉を聞いて納得することができなかった。なぜなら、祈りが私たちの苦しい状況になんら救いを与えるものではないような気がしたからだ。後にこのローマ法王の祈りの意味、祈りの持つ力を実感させられることになるのだが、この時の私には、祈っても何も事態を好転させないではないかという憤りがあったし、どこかでそんな慰めは必要ないという気持ちがあったのかもしれない。

#### 実際に被災地を訪れて

ローマ法王の言葉をようやく理解できたのは、震災から1ヶ月以上過ぎた4月末のことであった。南三陸町に炊き出しのボランティアに行ったときのことである。そもそもボランティアに参加した動機は、学生という時期に日本が直面したこの困難を自分の目に焼き付けておきたかったことであるが、それ以上に何かしなければいけないという焦燥感が強かったように思う。

炊き出しをして被災地の人々と交流しているときは、逆にこちらが元気をもらうような、被災者の方の復興への思いを感じて、今回の震災の深刻さを忘れていたくらいなのだが、

街を発つ前に防波堤から見た街は、もはや残骸でしかなかったが、その震災前の活気を想像するには十分すぎて言葉を失ってしまった。毎日メディアで報道されていた光景がそこには広がっていたが、現実で見たそれは想像を超える悲惨さと規模で、到底太刀打ちできないような絶望感を味わった。その時私は、祈ることしかできなかったのである。

### 祈りは諦めなのか？

被災地の光景を目の当たりにした私は、思考を奪われ、当初その行為自体に疑問を抱いていた祈りを自らしていたわけだが、その祈りは絶望をもとにして起こった行動ではなかった。確かに自分の存在の小ささや限界を思い知らされたが、少なくとも負の感情を根拠にした消極的なものではなく、もっと人間らしい感情に基づいていたと思う。そして祈ることによって自分自身が癒されたのである。

### 東京に帰ってきて

被災地から東京に戻ってきて、まず感じたのは人々の焦りであった。私も同様に、ボランティアに行く前には焦りを感じていたのだが、その時は異様に見えて仕方がなかった。実際のところ、電力などの制限はあったものの、被災地に比べれば普段通りの生活を送れるはずの東京で、人々の焦りの雰囲気はなんだったのであろうか。それはおそらく何か被災地のために役に立つような行動をしなければならぬという思いと、被害を受けていなくても今後これまでの生活が壊れていくかも

しれない不安があったからなのかもしれない。

震災後は、毎日のようにボランティアに向かう人たちの様子がテレビで流され、仕事を休んで被災地に向かうことがまるで美談のように語られていた。そこにはできることをやろう、実際に行動に移した人はすばらしいというメッセージが込められていたに違いない。だが、そうしたボランティアに励む人たちを称賛することより、むしろテレビを見ている人の何も行動できないという後ろめたさをあおっていたような気がする。ゆえに人々は焦り、不安を抱えていったのだろう。しかし、私たちにできることは被災地に赴くことだけではないはずである。私は、自分も同じく焦り、ボランティアに参加した経験からまさにそう思うのである。

### すべてを受け入れ、祈ること

ここで話をローマ法王の言った祈りに戻したい。私はこの言葉を聞いた時、全く意味を理解することができなかったのだが、今では祈りは必要で、大きな力を持っているものだと思う。この状況を受けとめて祈ることで安心できるのである。それは人が人智を超えたものに助けを求めたいという素直な気持ちから出発していて、さらにこの場合では被災された方やその他多くの人々に思いをよせることなのだと思う。人々の思いが集まれば、これ以上ない強い力を生み出すのである。

私たちは何もできないのではなく、誰にでもできること、そしてその力になかなか気づくことができないだけである。震災の後、こ

れまでの生活はあらゆる面で転換を余儀なくされ、今後も多くの課題に取り組まなければいけないだろうが、未来のために祈り、その意味で日本が繋がれたらいいと思う。



気仙沼復興への願い